題名（「大和玉椎（魂）」断鯛「柿（ガキ）大将」「なんにも仙人（何もせん）」など）に用いている．

また「歯」に関わる語呂合せは様々な事象に用いられている．例えば「ウバザクラ」「ウバユリ」などは花が咲く時期には既に葉（歯）が無いので老女に見立てて命名されている．また葉（歯）が花（鼻）より先（前）に出る事から所謂「出っ歯」を「ヤマザクラ」と言い慣わされている．各地の民話や昔話にもこの語呂合わせは散見できる．また，虫歯の痛みのある歯で，ある植物の葉を噛むと痛みが取れるという民話や伝承は各地に存在している．

口腔衛生について古くは「医心方」「正法眼蔵」「養生訓」などに記載が見られる．明治期に入ると「歯乃養生法」「固齢草」「歯の養生」「歯牙保護論」などが出版された．小児の口腔については「小児歯科衛生」「通俗乳歯の心得」などがある．これらは一般人向けの啓蒙書として高く評価されている．しかし幼児や子供を対象にした啓蒙書は大正，昭和初期に緑川宗作の「白い玉（口内の真珠）」や岡本清纓の「児童歯科読本」「むし歯の会議」などの著作を待たなければならない．

これらの事から，巌谷小波著「葉ぬけ爺」は語呂合わせの中に「歯を大切にする」という寓意を含んでいるのは明らかであり，当時の世相を考えるに「葉ぬけ爺」が幼児の口腔衛生の啓蒙にいち早く貢献したのではないかと考えられた．

11）ロベルト・コッホと富士塚信仰（その3）

Robert Koch and Fuji faith

医の博物館　西巻　明彦
日本歯科大学　屋代　正幸

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*
Masayuki Yashiro, *Nippon Dental University*

コッホと富士塚信仰は，基本的に関係はない．しかし，その関係のないコッホと富士塚信仰がなぜ結びついてきたのかについて，今回，論考を行った．

ロベルト・コッホ（1843～1910）は，ドイツより観光のため日本に明治43年（1910）に来日し，弟子の北里柴三郎と再会した．コッホの滞在は73日間に及ぶが，その中で6月21日，逗子，鎌倉，江ノ島を周遊し日帰りで東京帝国ホテルへもどっている．しかし体調をくずしたコッホは，7月2日より鎌倉海浜院ホテルへしばらく静養のため滞在することになる．コッホが湘南を周遊したことは，決して偶然ではない．ベルツが海水浴をすすめて以来，湘南の地は保養に最適であるとベルツや長与専斎らが主張するようになった．関西も，芦屋を始めとする阪神間の住宅は衛生的であると医師が主張したように，関東においても，それ以前に医師が主張していたことになる．長与専斎は，自からの別荘地のある由比ヶ浜にサナトリウムである鎌倉海浜院を開所するがうまくいかず，結局鎌倉海浜院ホテルとして出発することになる．まさに，その鎌倉海浜院ホテルへコッホが静養のため滞在することになる．なかなか回復しないコッホを案じた北里柴三郎は，近くの霊仙山にハイキングにさそう．この霊仙山からの風景は，三浦半島から相模湾をはさんで伊豆半島までを望み，遠く富士山をみわたせる囲繞景観であった．この囲繞景観に対して，コッホは朝，夕の光の変化をあわせて，激賞したという．このでき事を後世に伝えるため土地の所有者の村田久吉や北里柴三郎らが記念碑を霊仙山に建立した．その建立記念祭に，大正元年9月，コッホ婦人を日本へ呼んでいる．関東大震災で，霊仙山はくずれるが，昭和59年，このコッホ碑は，稲村が崎へ移動することになる．このため，コッホは稲村が崎からの景観をほめたといわれているが，実際は稲村が崎上の霊仙山からの囲繞景観を誉めたことになる．現在のコッホ碑は，稲村が崎の突端の富士山の眺めよい高い場所に建てられている．このため景観的には，コッホ碑側からみれば，富士山が正面にあり，コッホ碑を視点場とすると，富士山に対して眺望景観を呈している．ここで問題となるのは，本来コッホの眺めた囲繞景観の記念碑は，眺望景観に変質したことにより，土地と記念碑との意味性が変質し，くずれたことを意味する．そのため，正月などはコッホ碑に背を向けて富士山を拝む人も散見される．

富士塚信仰についてここでふれてみると，富士塚信仰は江戸時代の新興宗教で，角行を元祖とし，食行身録により発展したといわれる．基本的に終

末観からくる現世利益を追求し，生活律の中で家内安全や無病息災が富士溝という組織自体の中で確立したことであった．富士塚信仰そのものは，高田藤四郎が安永8年（1799年），高田水稲荷の境内に富士塚を築いたのが最初と言われている．しかしながら，元来富士山が見える場所で盛り土をして朝晩に拝んだことがそもそもの起源といわれている．八島五岳『百家奇行伝』によれば，高田藤四郎は富士八合目で月の来迎を拝む時，月の中に三尊の如来が見え，あたかも極楽に行ったような状況になることを問いた．当時，富士登拝はなかなかできるものではなかったが，富士の写しと言われる人造富士がおのが町内に存在することは，富士溝の信者にとってはきわめて魅力的である．富士塚は，江戸のみではなく，神奈川，埼玉など広範囲に及んでいる．富士塚は，富士山を視認できるもの，富士山のかたちをまねたもの，両者の性質をあわせもつものに分類することができる．また，その場所は，古墳，山頂，造山造園，斜面であることが多い．以上の事から，富士塚は，高さ，造園，その構造物にのることに共通性をみることができる．また，富士塚建設そのものは，造園の始まりのひとつともいわれている．

以上のことから考えてみると，稲村が崎のコッホ碑は，高さ，造園，構造物にのる，富士山を視認という富士塚の共通性質をそなえていることになる．また，明治の時代は，人が神になる時代であり，明治神宮，東郷神社，乃木神社，広瀬神社にみることができるし，コッホもまた北里柴三郎自体も，コッホ・北里神社（北里大学，白金キャンパス内）に神として祭られている．さらに，コッホは結核菌の発見など病の「おふせぎ」をした異国からきた神として要件をになっていることにもなる．このように，コッホ碑と富士塚信仰とは本来異なるものであるが，コッホ碑と日本の風土性のランドマークである富士山が，富士山を拝む人間とコッホ碑周囲の空間が合体する時コッホ碑の本来の意味とは異なる新たなる富士信仰の場が出現したととらえることもできる．

12）東京医科歯科大学顎顔面解剖学分野（旧口腔解剖学教室）が保管する石膏像について

The plaster bust that is belonging to Tokyo Medical and Dental University may show late prof. Michio Inoue

東京医科歯科大学　○秋本　和宏
阿部　達彦

Kazuhiro Akimoto, Tatsuhiko Abe, *Tokyo Medical and Dental University*

東京医科歯科大学大学院顎顔面解剖学分野（旧歯学部口腔解剖学教室）は昭和4年に故　藤田恒太郎教授が東京帝国大学医学部解剖学教室より着任したことに始まり，以降解剖学の教育を担当してきた教室である．

顎顔面解剖学分野が保管している石膏像について報告を行う．この像は，成人男性の胸像で黒い木製の台座の上に設置されていた．台座を含めた石膏像の大きさは奥行き約30 cm，横約30 cm，高さ約45 cmである．台座を除いた石膏像の大きさは奥行き約20 cm，横約23 cm，高さ約43 cmである．石膏像は白色石膏で製作されており中空で底面が開いている．場所によって藁により補強がされており，細部では石膏が積層されている．像の外観は立て襟のシャツにネクタイを締め上着を着装した状態であると思われる．中顔面部には少なくとも三色の着色が施され，左中顔面部には顔面裂の生じる部位に実線が記入されている．これらは顔面隆起に相当する部位であることから，解剖学の講義に用いられていたと推測される．

東京大学名誉教授（解剖学）養老孟司氏の著書「ヒトの見方」（ちくま文庫）によれば，故　井上通夫教授（東京大学医学部　解剖学）自身の顔をモデルとして製作された石膏像が東京大学医学部標本室に収蔵されていると写真を添えて紹介されている．この石膏像は東京医科歯科大学にあるものと極めて酷似しており，写真を撮り重ね合わせを行なったところ彩色は異なるが形状は一致した．また，日本解剖学雑誌中の井上通夫先生の写真と比較しても極めて酷似しており石膏像は井上通夫教授をモデルにしたものと思われる．